

知的財産戦略ビジョン エグゼクティブサマリー

AI やブロックチェーンなどの技術の活用、モノ消費からコト消費、シェアリングエコノミー、米国の GAF A や中国の BAT などの企業の台頭など、時代の変化のスピードは目を見張るものがある。こうした変化の中には、今後
も続く可能性がある予兆が多く含まれている（1章）。

2025 年から 30 年という将来を考えたとき、それを正確に予測することなど不可能だが、どんな社会にしたいのかを考えることはできる。人や産業や社会の仕組みをどのようなものにしていきたいのか。未来の社会において中核となる価値は何か。専門調査会の委員と事務局の間でタブーなく議論を戦わせた。もちろん、予兆がそのまま続くわけでもないし、揺り戻しのようなものも意識してみた（2章）。

そんな未来では、どんなことが社会的価値として共有されるのだろうか？個人の多様性や多面性が重視され、サイバー時代だからこそリアルな価値が高まり、「新しい」を生むことがますます必要になる。そしてそれらを可能にするのは、多様な個性が生まれ・活躍しやすい環境であり、「新しい」ことの源となるプラットフォームであり、多様な価値を包摂する社会の仕組みだ（3章）。

しかし、これだけでは世界どこでも同じになってしまう。日本の未来を考えれば、海外が一目を置く日本の特徴（独り勝ちを望まないバランス感覚、自然との共生、思想的柔軟性、新しいものを受け入れて研ぎ澄ます編集力など）を活かすことが不可欠だ。一方で均質性など過去には優位性をもたらした特徴が弱点にならないようにする、さらには、他国に先立って日本が直面する状況（最も先を行く少子高齢化）をチャンスにするとの視点も必要だ。これがうまくできれば、日本が生む様々な価値、日本ならではの様々な価値が世界で共感され、リスペクトされる可能性が広がる（4章）。

そのためのポイントになるのは、新しい価値を次々に構想し、発信し、これが価値だと定義してしまうくらい世界にも認められるようになることだ。そんな「価値デザイン社会」を日本は目指したい。プラットフォームに人を集め、データを収集し価値を創出するとともにマーケティングに活用していく。Google、使われてない資源をマッチングさせてユーザーの利便性を向上

させたウーバー、そんな新しい価値のデザインを日本から次々と生み出し「その手があったか」「一本取られた」と世界中の人に感じさせたい。もちろん、簡単なことではない。今までの均質ではなく脱平均の発想で臨む、やってなんぼの精神で試行錯誤する、サプライ側から一方的に供給することよりも消費者側のリアルタイムな評価に軸足を置く、など変えなければいけないことは多い。最初から完璧に機能する社会変革はない。様々なステークホルダーが協力し、試行錯誤しながら改善していくのがオープンイノベーションの特徴でもある。そんな「価値デザイン社会」に共感して世界中から異能が集まり何度でもチャレンジする、様々な力が出合い、融合して価値をデザインしていく場がたくさんある、そして世界をうならせる価値をデザインして発信して、世界で共感され、リスペクトされていく。それを実現するために、鍵になる広義の知的財産に関連するようないくつかの新しい仕組みの例も提案した。このビジョンが将来の知財システムを考える戦略の出発点になることを期待する（5章）。